

平成 29 年度（通算第 15 回）

国際交流推進協議会

平成 29 年 9 月 13 日（水）
アルカディア市ケ谷（私学会館 3F 「富士の間」

Ⅲ．協議

基調講演

国際交流の指針について

—どの国際組織と提携し、どのプログラムに参加するか—

講 師

日本私立大学協会常務理事・ASEAN特別委員会委員長
大阪商業大学理事長・学長
谷岡一郎氏

皆さんこんにちは。

今ここに、いろいろな a b b r e v i a t i o n を提示しておりますが、全部わかる人はまずいないと思います。国際交流に携わっている人でも、いったいこれは何だと思えるものがあるのではないのでしょうか。これは私が関係したものをいくつか表示しているのですが、たとえば今日、皆さんのお手元には「U C E C」というのが入っておりますが、じゃあ「U C E C」って何なんだと言われても、すぐに答えられる人というのはなかなかいないと思います。

世界的な組織もあれば地域の組織もあれば、もう今はない昔の組織もあります。このほかにまだまだあります。世界でも有名な組織ですけれども「I I E」なんていうのは出てきません。また各国に、たとえば今日お越しになっている台湾などでは「F I C H E T (フイチェット)」という組織がございますし、韓国では「K C U E (K o r e a n C o u n c i l f o r U n i v e r s i t y E d u c a t i o n)」というのが昔は韓国全体を束ねる組織として存在しておりました。今は違う名前になっておりますが。

日本のプログラム一つにしてもG P であるとかグローバル30、キャンパスアジア、そういったものを全部頭の中で把握できている人というのは、なかなかいないわけです。また、そういうプログラムがいつの間にか消えていたり、いつの間にか生み出されたりすることもございますので、なかなか頭の中で理解しづらい。

今日、私は基調講演として、長い間この世界にいた者として、皆さんがこういうものどれに加盟しようかな、どれから誘いを受けたけどどうしようかな、そういう考えをお持ちのときに、いったいどういう指針でこの組織に参加する・しないということを決めるべきなのかということ、ちょっとお話しするつもりでやってきました。

私は三つの大分類枠組を設定いたしました。一つめは、どれだけの国や地域を守備範囲や領域とするかということです。

失礼ながら皆さんの国際交流の中には、得てして受け身的で、どこから交流の申し出があったからMOUを交わしましょう、交わすかどうかというのを教授会やいろいろな理事会で話し合っ、じゃあやりましょうかというのが多かったと思います。もちろん自分から、私はこういう大学と交流したい、こういう理由でこういう人と交流したい、だからあそこに申し込もうという日本の大学もないではないでしょう。しかし皆さん、胸に手を当てていただきますとわかるように、だいたいにおいては日本の大学というのは受け身的にMOUを、どこから申し出がありました、どうしましょう、という話を中心でした。

ですからまず、その組織がどれだけの国や地域を守備範囲・領域とするか、これを「G e o g r a p h i c a l - F r a m e」、要するに「G - F r a m e」と呼んでおきます。これは私の命名ですからオフィシャルでも何でもありません。

二つめの質問といたしまして、高等教育機関のどのレベルをターゲットとするか。今の日本の国際交流を見ていると、学長も出てくれば国際交流課長も出てくれば、場合によっては学生も出てくるという具合に、どのレベルが対象となっているのかというのがさっぱりわからないムードがあります。

したがって、国際交流を進めるにあたっては、国際交流機関のどのレベル、たとえば学部長レベルなのか、たとえば学長レベルなのか、たとえば理事長レベルなのか、のどのレベルを参加ターゲットとするかということです。もちろん複数あっても構いません。

三つめは、その組織・プログラムがめざす目的は何か。単なる単位互換なのか、学生の交流なのか、職員のいろいろな研究なのか、もしくは単なる友好なのか。そういったいろいろなことはもちろん機能として存在いたしますけれども、その中でどれを中心としてこのプログラムに参加しようとしているのかということが、実はなかなかよくわかっておりません。

したがって、このG-Frame、H-Frame、F-Frame (Functional-Frame) までの三つのフレームをカバーするものが、やはりターゲットとしては一番いい組織・プログラムであるということになります。

それを決めるには、まず皆さんの大学法人、機関決定、うちの大学はこういう国際交流をめざすという基本方針がまずありきです。その基本方針があってはじめてターゲットや組織・プログラムのニーズが生まれてくる。その中にはもちろん学生からの要望もあるでしょう。下からの要望もあるでしょうし機関の上からのトップダウンの方針もあるかもしれません。でも、こういったものを考えずに闇雲にMOUを受け入れているだけでは、はっきり言わせてあまり実のあるものにはなり得ないというのが私の意見です。

まずG-Frame (Geographical-Frame) で考えますと、一番下は大学と大学のMOUです。Memorandum of Understandingと呼ばれていますけれども、交流しましょうという約束をしてそれを実行していくものです。一番上は世界全体を巻き込むような組織もいくつかあります。私が知っているだけでも10個ぐらいありますけれども、たとえば一番有名なのはIAU。今、森田会長からご紹介がありましたけれども、International Association of University。これ実はフランス語圏ではAIUと呼んでおります。それからUNAI、これは今日お見えの学生さんたちも関わっているプログラムがございますけれども、世界的な運動として進めていこうと。ただ、これは学長やそういったものを対象としたものでは全然ないのです。だから世界レベルにおいても、学長や大学単位をターゲットとしたものもあればそうでないものもあります。

地域と言えば、たとえばAUAPだとかUMAPがあります。UMAPというのは、University Mobility in Asia and the Pacific、アジア太平洋交流機構のことです。これは昔、エラスムス計画でヨーロッパがブロック化され、NAFSAを中心としてカナダ・アメリカ・メキシコというものがブロック化され、教育圏というものが段々ブロック化されていった動きのときに1991年に設立された、アジア・太平洋地域を教育圏としてまとめようという動きの中でスタートいたしました。オーストラリアが当時中心となって動いておりましたが、今は日本が中心となって動いているプログラムの一つです。これは私、古くからかかわっておりますのでよく知っていますが、そういったレベルもある。この場合は地域と地域になりますね。

それで国ですが、日独大学フォーラムなんていうのがあります。日仏もありますし日本・カナダもありますし、日タイもありますし、いろいろございます。でもそういったもの全てがやはり国と国とでこういうことをやっていこうというプログラムを組み合わせ、お互いに交流を進める。続いているのもあれば単発的に終わっているのもあれば休眠中のもあります。ただ、そういうふうにはG-Frameにおいては国より上が普通は考えられるのですけれども、例外的に大阪市と上海市が教育交流協定を結びましょうみたいな、お

互いに何人ずつ交流しましょうなんていう約束をすることもあります。

こういうふうにはいろいろなG-F r a m eがあるのですが、地域が大きければいいというものでもないのです。地域が大きければ結局、焦点がぼやけてきますから、目的に従っては実はあまり有効じゃない。有効性を高めるには、継続性も含めて高めるには、どちらかと言えば小さめのG-F r a m eに特化するほうがいいのではないかというのが私の意見です。

また、学長や理事長を対象とするものがあったり、副学長・学部長・所長・館長や事務局長や部長・課長が対象となるものもあれば、教授レベルでいろいろなものやっという組織もあります。場合によったらASPIREのように学生たちが中心となってお互いに交流していきましょう、例えばアカデミックインパクトもそうなのですけれども、このようなプログラムもございます。

ですからH i e r a r c h i c a l - F r a m e (H-F r a m e)においては、どのレベルとどのレベルをターゲットとしどんな交流をするのかということが、まず機関決定されていなければ、またこれもちょっと焦点のぼやけたものになる可能性があるということです。ですから皆さんはぜひ、このH-F r a m eもあるのだということを覚えておいてください。

F-F r a m eというのが、実は一番重要になります。まず、高等教育システムの向上というものを目的とするF u n c t i o n a l - F r a m e (F-F r a m e)を考えますと、教育機会の保証・普及となります。今日は課長レベルの方が多いと思いますが、これはたとえばさっき言いましたIAUとかIAUPなどがお互い集まって、イスラム圏の女性にどうやったら男性と同じような教育の機会を与えることができるのかを世界中で話し合おうということ、世界の教育の責任者たちが一所懸命委員会を持ったことがあるのですけれども、そういうふうには教育機会の保証・普及や教育情報の共有が課題となります。教育手法の研究・研究発表というのも、高等教育システムの向上を目的としていくつもおこなわれております。

ですからこの高等教育システムの向上レベルになりますと、大学の責任者もしくは文部科学省に相当するところの責任者たちが集まって、何とかやっというレベルになります。

大学評価システムはたくさんありますが、国の中で評価システムを作っているのは、世界でお互いに単位互換するときにはたとえばどういう評価でこの大学の単位をこれだけに換算しようということがおこなわれなければいけません。もちろんERASMUSなんていうのも単位互換システムではありますけれども、成績評価をどうトランスファーしていくかというのもまた大学評価システムの一つになります。

それから留学生交流の活発化ですが、これは多分皆さん、かなり関係してくると思いますけれども、お互いの単位をどのように互換していくのか。たとえばショートプログラムを短期で夏の間だけ何十人やりましょうというプログラムの開発やMOUを交わす、あるいは奨学金をどんなふうに出していくのかといった留学生交流の活発化自体に関しても、いくつかの問題をF-F r a m eの中で考えることになります。

アドミニストレーションレベルもあります。経営・人事、会計、カリキュラム内容、学生サービス、図書館・情報、または法律や税制に至るまで、このアドミニストレーションと

いうのは大変いろいろなことが出てきます。問題としてそれを話し合う機会もあります。NAFSAなんかがそうです。

それから友好というのは、実は一番大きいのですが、これがF u n c t i o nの中でもかなり大きな部分を占めるというふうにお考えください。

さて、三つのフレームを紹介してきましたけれども、最初に言いましたように機関の方針ありきです。一番重要なことであるにもかかわらず一番ないがしろにされているのは、その高等教育機関の国際交流に対する方針、哲学であろうと思います。少なくとも、次の三つの事項が明確でなければ、国際交流は表面上の体裁にすぎないものに終始することになると思います。その一番目は、皆さんの学校の国際化の定義は何ですかということです。いろいろな大学のいろいろな方にお聞きしましたが、明確な答えが返ってきたことはあまりございません。皆さんももう一回考えてみてください。私の大学の国際交流の定義は何なんだと。

その前に国際化の必要はあるのか。こんなもの必要ないよという大学があったとしても構いません。それから必要があるとして、長期・中期・短期の目標は何か。その目標に向けた具体的プランはあるのか。それを考えたうえで最終的に、さっきのフレームを三つ、大項目でどんなものに入っていくのかということを決めるのです。

そして最後は建学の精神に戻るべしと書いてありますけれども、実はもう一つだけ最後にもものすごく重要なことがあります。それは、いくらかかるのかということです。

要するに、IAUなんて参加料がやたら高いです。IAUに比べますとIAUPはかなり安いです。IAUPに比べてもっと安いのもいっぱいあります。そういう意味において、コストパフォーマンスですね。ここに本当に入る価値があるのかというのは、皆さんのレベルでちゃんと上に具申してここに入るべきだと。なぜならこういう理由によると。そういったことを決めるのが皆さんの役割だと考えて、今日は基調講演とさせていただきます。

どうもご静聴ありがとうございました。

(以上)